

2014「夏の水景」フォトコンテスト審査結果発表

今年も「夏の水景」フォトコンテストにたくさんのご応募をいただき、誠にありがとうございました。

たいした宣伝もしておりませんが、年々、ご応募の総数も増えており大変ありがたく思っております。

当コンテストも8回目を迎え、審査中にもコンテストそのもののあり方や作品の評価について様々な意見や厳しい指摘も出てまいりました。

噴水を楽しんでもらう・・・という、噴水メーカーとしてごく単純な発想からフォトコンテストを、元々は社内フォトコンであったものを一般公募という形で始めてここまで進めてまいりました。

審査に参加していただいた蔵真墨先生のご指摘にもありますように、写真としての質、何を取りたいのかの明確化などを始め、趣味で写真を撮る私自身としても考えるところ大いに在りと言わざるをえませんね。

翻って言えば、コンテスト主催者としての立場の明確化や皆様と共に楽しんで写真を撮る姿勢を、今一步考える良い機会に立ち立ったような気が致します。

もちろん、次回も「夏の水景」フォトコンテストを開催する予定であります。

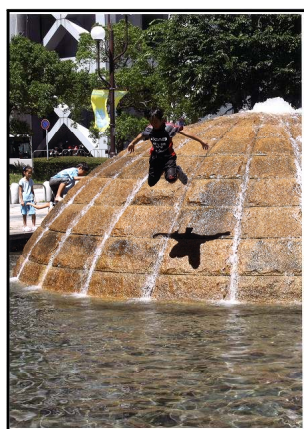
どうぞよれからもふるってご応募下さり、この他にはない「水景フォトコンテスト」にご応募下さいますよう心よりお願い申し上げます。

最後になりましたが、今回ご当選の方々、おめでとうございます。最優秀賞には3万円、準優秀賞には1万円、佳作には記念のお品をお送りさせていただきます。

重ね重ね、ご応募していただいた皆様に御礼申し上げます。

平成26年10月30日
株式会社ドウサイエンス
代表取締役 香取良一

【最優秀賞】



作品名「ダイビング」
市川秀明 様

【準優秀賞】



作品名「雨のやみ間に」
竹中京一 様

【佳作】



作品名「流水で楽しむ」
関矢俊夫 様



作品名「まるで絵画のようです！」
平石愛子 様



作品名「白の帽子がおどる」
佐藤隆史 様

第8回水景フォトコンテスト「夏の水景」 講評：蔵 真墨

水景が最も輝く季節、夏のフォトコンテストにたくさんの写真をお寄せいただきました。まずは最優秀賞の作品から見ていただきます。

(市川さんの作品)

市川秀明さんの「ダイビング」は少年が水に飛び込んで遊んでいるところを撮影したものです。少年が疲れることなく体を動かして無心に楽しんでいる様子が伝わってきます。その濃い影に夏らしい日差しを感じます。後ろに写っている少年も飽きずに何度も登っては飛び込み、飛び込んで登っているのでしょう。夢中になっている姿は魅力的です。

(竹中さんの作品)

準優秀賞の竹中京一さんの「雨のやみ間に」は趣が変わります。女の子が傘で水を切り見事な水の壁を作っています。どんな場面なのか女の子がどんな表情なのか写真からはうかがえません。画面が整理されていて情報が限られているからです。色調は全体的に彩度をおさえ、モノクロ写真に彩色したような印象です。ミステリー小説の一場面のような不思議な物語性のある写真です。

(関矢さんの作品)

佳作は三作となりました。関矢俊夫さんの「流水で楽しむ」は画面右側を走って行く二人の女の子の表情や仕草に自然な優しさが現れています。一方、画面左側には落ちてくる水のカーテンがあり、その奥に描かれている鳥の絵がゆらぎ抽象画のように見えるのも面白いです。

(平石さんの作品)

佳作、平石愛子さんの「まるで絵画のようです！」は水をはった桶にひょうたんがぼっかり浮かんでいます。奥にスイカも見えます。色がはっきりしていてコントラストが高く、水泡と合わせて夏の名脇役たちが写されています。これを撮ろうというフレーミングの意志が感じられて、それはシンプルながら大切なことのように思います。

(佐藤さんの作品)

もう一つの佳作は佐藤隆史さんの「白の帽子がおどる」です。ほぼ等間隔に配置された噴水とシンクロするようにぼつりぼつりと連なる子ども達の帽子。配置にテンポがあり、公園の日常風景の中から切り取った興味深い一枚です。

さて、今回応募いただいた作品の全体的な傾向ですが子供が水と戯れる写真が多くありました。子供が楽しんでいる写真は愛らしいのに間違いはありませんが、贅沢をいうならば大人が水景に親しんでいる成熟した雰囲気をつたえた作品も見てみたいところですが、また、子供がモデルとしてポーズしていることにやや退屈している感じが伝わってくる作品もありました。子供の撮り方は難しいですが、写真を撮る方が盛り上げて一緒に楽しみながら撮る、もしくは自然な表情を素早く切り取るというように今一步工夫してみてもいいのではないでしょうか。

もう一つの印象としては撮影者の意図がどこなのか伝わりにくい作品が多かったということです。ポイントとなる被写体は水なのか人なのか、もしくは両方のバランスなのか、それとも風景全体なのか、散漫にならずに画面をまとめる方法を考えることも写真の楽しみです。写真は絵画と違って意図せずして背景にさまざまなものが写り込めます。少しだけ技術的な話ですが、これを生かしたいとき、風景全体を見せたいときは絞り値を大きくすれば全体的にピン트가あった写真になります。逆にメインとなる被写体だけを見せたいときは絞り値を小さくすれば背景がぼけた写真になります。

もう一つの技術的なポイントはシャッタースピードです。水の表情はシャッタースピードの速い、遅いで全く違って写ります。そこに撮影者の意図が現れてきます。

この水景フォトコンテストがさらに実り多いものとなるよう今後、実験的な意欲作を見ることができれば幸いです。もちろん難しいことを考えずとも楽しんで撮った写真も大歓迎です。今後とも水景フォトコンテストをよろしく願いいたします。

蔵 真墨（くら・ますみ）：写真家。同志社大学文学部卒業。

東京ビジュアルアーツ写真学科に学ぶ。

2010年さがみはら写真新人奨励賞。

近年のおもな展覧会に「氷見」

(2013年、中京大学アートギャラリー C・スクエア)、

「この世界とわたしのどこか 日本の新進作家 vol.11」

(2012年、東京都写真美術館)。